

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成20年度派遣報告書

——エジプト、アル＝ディーワーン ガーデン・シティー校、アラビア語、H20.8.22-H20.11.14——

平成19年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程2回生

安田 慎

自身の研究について（～600字）

本研究は、現代イスラームにおける参詣（ズィヤラー）の実態と社会的意義を明らかにするものである。

イスラームにはメッカに向かう巡礼（ハッジ・ウムラ）と参詣（ズィヤラー）という大きく分けて二つの巡礼現象が存在する。前者は啓典クルアーンにもムスリムが行うべき義務として明記されており、現代では世界各地からムスリムが集まる、イスラーム最大の宗教行事と言える。他方後者の参詣は、イスラームに関連する廟や聖所に向かう行為一般を指すものであり、時代や地域を問わずに広く行き渡った現象であった。現在でも地域を問わずにさまざまな形でその伝統は受け継がれている。こうした長い歴史を持つ巡礼と参詣であるが、その形態や社会的意義が常に同じものであったわけではない。むしろ、巡礼と参詣はその時代時代の社会的状況を反映し、人びとの生活状況や希求に関わる形で、その効用や意義が語られてきたと言える。その点、社会の状況を知るためのバロメーターのひとつとしての役割があるとも言える。

本研究は、20世紀中葉より特に大きな変化を遂げてきたシリア国内のシーア派参詣地を対象に、その現代の実態と社会的意義をシーア派の観点から明らかにするものである。特に近年見られる各地のシーア派の政治的・社会的台頭、中東における観光産業の発展、さまざまな情報技術の発展に注目する形で、参詣の現代的形態と社会的意義を明らかにするものである。

研修言語の概要（～200字）

研修言語のアラビア語は、中東・北アフリカで広く話されている言語である。元々はアラビア半島で話されていた言葉だが、イスラームの拡大とともに各地に広まった。だが現在では多様な方言が存在し、書き言葉（フスハー）と話し言葉（アンミーヤ）に大きく分かれている。書き言葉はニュース番組や公的な場で使用される言語として地域や世代を超えて汎用性がある一方、現地の人びとはアンミーヤを普段の生活の中では使用している。

語学研修の内容について（～600字）

アラビア語独特の言語状況を踏まえた上で、今回はフスハー（書き言葉）の会話習得に焦点を絞った。その理由として、以下の2点があげられる。①今後のフィールド調査では参詣者から参詣事業に関わる人びと、宗教指導者や政府関係者と幅広い人びとに聞き取り調査をすることが考えられるため、最低限の日常会話と自身の研究に関連する項目以外にも、幅広い話題の会話ができるようにしておくことが求

められた点。②会話を習得するにあたって、アンミーヤを習得するよりもフスハーを習得した方がさまざまな地域と階層の人びととの会話が可能となり、汎用性が高い点。また、研究対象のシリアと研修先のエジプトでは方言に大きな違いがあるため。

授業は1日に5時間、基本的に週6日間のペースで行った。授業の進行は、大きく2つの形で進められていった。ひとつは語学研修先のテキストを使用し、テキストに関する項目を使って特に文章を自分で考えて書くことに重点を置く授業。もうひとつは、日常で起こるさまざまな会話状況を想定し、先生との間でさまざまな質問をして会話を進めていく授業である。後者では自己紹介から日々の出来事、日常のさまざまな場面を想定した会話、日本文化やエジプト文化について、自分の研究についてと幅広い会話を行った。また、先生と一緒にカイロ市内のさまざまな場所を回り、校外学習の形で会話能力を高めつつ、エジプトの文化について知る授業も何度か行った。

研修期間中に印象に残った体験や経験（～400字）

研修期間中、大きく残った記憶が2つある。まずはラマダーン（断食月）。昨年中東に研究調査に行った際も断食月と重なったが、今回も丸1ヶ月断食月を経験することになった。断食月中、昼間はムスリムの人びとは断食を行うため街に活気がなくなるが、逆に夜は道端でイフタール（断食明けの食事）を楽しんだり、他人の家を訪問したりしてお祭り気分を楽しんでいた。自分も道端で何度もイフタールに飛び入りで入れさせて貰い、人びとと一緒にラマダーンの一時を楽しんでいた。

次にタリーカ（イスラーム神秘主義教団）のハドラ（集会）に参加したことである。カイロ市内の一角でさまざまなタリーカがハドラを行っているが、期間中にブルハーニーヤ教団のハドラに参加させてもらった。さらにナイル・デルタ中部の都市、ドゥスークのハドラにも参加し、貴重な体験をすると同時にさまざまな人びととの交流を深めた。

目標の達成度や反省点について（～400字）

語学研修を通じて簡単な自己紹介や基本的な項目に関して自己表現をできるようにはなったが、聞き取りに大きな課題を残した。そのため、相手がしている会話の内容を理解するのに大幅な時間がかかり、会話が進展しないということが多々あった。聞き取りに関しては今後の大きな課題である。

また、自分の研究の内容を説明するための基本的知識と、アラビア語の単語数が圧倒的に少ないことを改めて認識させられた。そのため、専門的な会話がなかなかできないという困難が常に付きまとうことになってしまった。この点も今後の大きな課題である。

しかしながら大きな成果としてあげられる点があるとしたら、現地での研修とさまざまな人びととの交流を通じて、今まで先入観として持っていたアラビア語に対する苦手意識が大幅に減じたことであろう。帰国後の継続的なアラビア語習得に対する意欲がわいた点で、本語学研修は大変有意義なものであったと言える。



写真1 語学学校の先生と



写真2 授業風景



写真3 ドゥスークのハドラ